

連載⁰⁸

内海善雄の
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み
「ネット社会」論

グローバル化時代に、 日本に歩んでほしい道④「報道」

を知り尽くす訓練を徹底的にしたという。

個人主義のオランダチームの弱点と日本チームの長所を知り尽くしたオランダ人コーチの科学的な作戦と、日本的なチームワークを実現した選手の努力、まさに和魂洋才の結果である。まるでグローバル時代に日本が勝ち抜いていけるための教訓を示しているようであった。

実は、スポーツ音痴の筆者が競技をこのように理解できたのは、事前に女子パシュートチームを解説したNHKの啓発番組を偶然見る機会があったからである。この番組を見ていなかったら、単純に日本のチーム・スピリットはすごいと感心しているだけであつたらう。

一方、頭を傾げるようなオリンピック報道もあつた。典型的なものは、まだ二個しかメダルを取っていないのに、「メダル・ラッシュ」とアナウンサーが興奮して声を張り上げ、閉会時には「長野を抜くメダル量産」「過去最高のメダル・ラッシュ」と一斉に報道したことである。

国民もすっかりその気になったが、長野はメダル数十個で七位、今回は十三個で十二位

である。この間に競技種目数は六十八から百二に増加しているため、なんと、今回十五個を獲得して、やっと長野並みの成績となる。選手の活躍とともに喜びたいが、客観的に見れば、日本は弱体化しているのである。

メディアに頼りざるを得ない現状認識

欲しい情報はどんなものでも簡単に得られるネット時代ではあるが、何が有益な情報なのか分からないから、自分一人で有益な情報を発掘することは難しい。どうしても受け身で入ってくるマスコミ報道に依存せざるを得ない。世界情勢を正しく理解していなければならぬ中央官庁の政策部門にいた筆者も、一般的なことはもっぱらマスコミ情報に依存し、あまりにも現状認識ができてないことを発見して冷や汗をかいたことが何度もある。例えば、一九八〇年代にシンガポールに出張した時、現地新聞を見ると中国への投資が日本を抜いて一位であることを知り驚いた。アジアのフォア・ドラゴンと言われて、韓国、台湾、シンガポール、香港の発展が日本で騒がれたのは数年も後のことであつた。

一九九九年、ITUの事務総局長になって

平昌オリンピックでは日本選手団が活躍し、大いに感動させてくれた。中でも女子団体スケート(パシュート)は、圧巻であつた。

質の高かったオリンピック解説

最も速い高木美帆をどれだけ先頭で滑らせ、どれだけ後方で体力を温存させるとチーム全体のスピードが最高になるのか、選手全員の体力とスピード、時間、心理などをパラメータとする複雑な方程式の最適解を綿密に計算した作戦があつた。

しかし、その作戦だけでも勝てない。体格と脚力の違う各選手が、ぴつたりと歩調を合わせて選手間の距離を最小限にして空気を抵抗を減らし、また、交代の時間を最小限にすることによって、その作戦が生かされる。そのため、長期間の合宿訓練で、各選手がお互い



数や規模だけが先進国では困る

赴任してみると、日本では誰もインドのことに関心がなかったのに、世界中がインド市場に食い込もうと活動している状況を知った。その時、すでに中国はアフリカの電気通信網の建設を行っていた。日本がアフリカ市場に目を向け始め、アフリカ関連の新聞記事が出るようになったのは、二十年近くも後の最近のことである。等々、枚挙に暇がない。日本の世界市場に関するマスキミの情報は、少なくとも数年は遅れており、一般に報道された時は手遅れとなっている。さらに、日本企業は事実を知ってから行動を起こすまでに時間がかかる。これでは、どんなに頑張っても浮かばれない。

タイミングよく報道していても、もう少し

掘り下げて取材しなければ、現実を誤解してしまう例もある。例えば、ICT産業の凋落の原因である。

筆者はITU事務総局長として世界のICT産業を見ていたので、この十数年間の日本ICT企業の凋落の真の原因は、IP化や携帯、スマホの発展などの技術革新の方向を見誤り、また、開発途上国の巨大市場に挑まなかったこと、設計特化と大規模下請けの出現による生産体制の世界的な効率化に対応しなかったことなど、経営上の問題であると前から分かっていた。

しかし、マスキミは、円高によるコスト高や世界標準に従わなかった標準化政策、さらにはガラパゴス化現象など、経営サイドの言い訳を鵜呑みにして本質でないことを報道し続け、経営の怠慢を見過ごしてきたと思う。最近になってやっと皆が深刻な現実を認識できるようになったが、すでに挽回が不可能と思えるぐらい疲弊が進んでしまった。

正鵠を得た報道を享受できるために

グローバル化の時代には、ますます世界情勢を客観的にリアルタイムで理解することがサブバイバルのための不可欠条件である。

日本には、発行部数が世界でトップの大新聞と公共放送のNHKや民放ネットワークが存在する。数や規模の上ではマ

スキミ先進国である。しかし、どのマスキミ報道も金太郎飴的で多様性に欠ける。大新聞であるが故に、また、大ネットワークであるが故に、経営上国民の関心に迎合的になることはある程度致し方ないが、本来の使命を忘れると自らの首を絞めることになる。

世界的なNGOである「国境なき記者団」による日本の報道の正確性の評価は、二〇一〇年には世界で十一位であったのが、最近は七十二位にまで落ちこんでいる。必ずしもNGOの評価が正しいものとは思えないが、国民の目が向いてないところ、また、少数意見や批判的な意見に真実や新しい動きがあることを肝に銘じて啓蒙的な報道をしてもらいたいものだ。

しかし、国民が正鵠を得た報道を享受できるといえるか、ネット上には大資本を必要としない新メディアも出現していることだし、受け手である大衆が良質なメディアとそうでないものを取捨選択するかどうかにかかっているとと思う。



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。通信・電力・自動車関係企業や各種団体の役員、大学教授などを歴任。IEEE名誉会員。

(敬称略)